

民俗学における競技の対象化に関する一考察

井上宗一郎

近世以降の素人相撲をめぐる競技体系の近代化から

A Study on Objectification of Tournaments in Folklore Studies : From Modernization of the Tournament System over Amateur Sumo after the Early Modern Period

INOUE Soichiro

はじめに

- ① 本稿の目的
- ② 民俗学が対象とする競技および相撲
- ③ 近世末期以降の神事相撲と興行相撲組織
- ④ アマチュア相撲と素人相撲
- ⑤ 結語

【論文要旨】

昨今、日本の相撲、特に大相撲やアマチュア相撲の動態は、相撲に付与された「国技」という呼称、およびそれに付随して共有されているイメージを揺るがしつつある。大相撲における外国人力士の台頭、アマチュア相撲によるオリンピック公式種目登録への動きなど、選手構成、組織の運営方針や競技の形態などの多様な展開がその大きな要因のひとつである。その一方、力士の人間性や所作などについては、宗教的な言説を基盤とした二種の様式美とされ、「品格」、「品位」といった言説と絡み合いながら、「日本の伝統的競技」の代表的なもの、つまり「国技」として位置付けられる要因となっている。

これまでの民俗学における相撲研究では、相撲の「国技」たる「品格」を保証するよ
うな、相撲の宗教儀礼としての側面のみを照射し、それ以外の側面についてあまり語られ

てきていない。そこには、民俗学固有ともいえる事例の選別や、言及の指向が存在しており、さらに言うならば、民俗学は相撲のみならず、競技を競技として対象化してこなかったのではないかと考える。

本稿ではまず、民俗学における競技についての言及を振り返り、その固有ともいえる指向を検討する。次いで北陸地方で行なわれている神事相撲の事例を通して、対象とする事例を拡大して検討することで、民俗学での競技に対する、より開かれたアプローチの構築に寄与したい。

【キーワード】 神事相撲、アマチュア相撲、伝統的競技、外来スポーツ、近代化